

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：34435

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04284

研究課題名（和文）HIV陽性者の高齢期の生活課題と支援に関する研究

研究課題名（英文）Research on life issues and support for people living with HIV in old age

研究代表者

大野 まどか（Ohno, Madoka）

大阪人間科学大学・人間科学部・教授

研究者番号：00340886

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、HIV感染症の治療の進歩に伴うHIV陽性者の高齢化に関する問題を明らかにし、HIV陽性者の生活支援のあり方を検討することを目的とした。

HIV陽性者へのインタビュー調査を通して、当事者に共通する高齢期の生活課題への捉え方、福祉サービスの利用への消極性などが明らかになった。さらに、HIV陽性者への訪問ボランティアを行なっている看護師へのインタビュー調査とエイズ治療拠点病院の医療ソーシャルワーカーとのセミナー、討議を通し、高齢期の地域生活を支えるための社会資源などの課題と展望を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

HIV陽性者に関する研究は特に国内では社会福祉学、ソーシャルワークの見地からは決して多くない。しかし、病とともに生きる「生活の支援」を考えることはますます重要となると考える。また地域での高齢福祉サービス事業者はHIV陽性者支援の経験が少ない上に支援専門職自身がセクシュアリティへの理解が十分とは言えない。本研究で、当事者の持つ高齢期のイメージとその課題、セクシュアリティと感染症に関連する思いや問題を取り扱うことは、福祉サービス従事者への理解を促す一助となると考える。これらの点から本研究の意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the problem of the aging of people living with HIV due to progress in treatment of HIV infection, and to examine the way of support for the life of people living with HIV.

Through interviews with people living with HIV, we clarified how to perceive the life issues common to those, and their reluctance to use social services. In addition, through interviews with a nurse who visit people living with HIV as volunteers, and giving a seminar and discussions with a medical social worker at AIDS core hospital and the nurse, issues such as social resources to support community life in the elderly and considered how to deal with it.

研究分野：医療ソーシャルワーク

キーワード：HIV/AIDS HIV陽性者 セクシュアルマイノリティ 医療ソーシャルワーク 高齢期 高齢福祉サービス

1. 研究開始当初の背景

HIV 感染症の治療は 1997 年以降、多剤併用療法の導入と共に大きな進歩を遂げたが、それに伴い慢性疾患として医療面に加え生活面でさまざまな支援が必要となった。

(1) 地域における HIV 陽性者（以下、陽性者）の療養の場の不整備

HIV/AIDS 治療に関しては全国のエイズ診療拠点病院（以下、拠点病院）が基盤となるが、長期療養生活を支えるためには連携する医療機関や福祉サービスが必要になる。しかし、療養型病床の受け入れ困難、在宅医療体制の不備、福祉施設の入所困難等、長期療養の場の確保は難しい状況である。

(2) エイズ治療拠点病院の現状と医療ソーシャルワーカーの支援経験のばらつき

須貝¹らの調査では患者の偏在と一部拠点病院への患者の集中がうかがわれる。小西らが全国の拠点病院の MSW に行った調査²の結果から、拠点病院の医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）の支援経験には大きなばらつきがあることが分かる。また高齢の陽性者への支援経験についての調査³からは、要介護状態にある陽性者への支援経験はさらに少ないことがわかる。

(3) 偏見・差別の問題とプライバシーとセクシュアリティへの対応

陽性者らの感染経路をみると、陽性者の 72.3%、エイズ患者の 56.7% が同性間性的接触となっている⁴。感染症であること、その感染経路に性行為の割合が一定数あること、感染者の性的接触が同性間のものによるものが多いことから社会的偏見も強い。患者にとって病名やセクシュアリティが自分の望まない人々へ漏えいすることへの危惧は根強いものがある。このような状況にある陽性者への支援において、セクシュアリティを踏まえたアドボカシーの視点が必要な点は特徴的である。

2. 研究の目的

HIV 感染症治療の進歩による陽性者の高齢化から生じる福祉サービスの利用を含めた高齢期の生活支援は重要な課題である。陽性者の多くがセクシャルマイノリティであることから、いわゆる生殖家族を基盤としない当事者の高齢期の生活とそこに生じる生活問題に対して当事者のもつイメージを明確にし、長期療養生活への支援のあり方を明らかにする。

3. 研究の方法

2019 年に 40～50 歳代の HIV 陽性ゲイ男性 3 名（感染判明から 11 年±3）にインタビュー調査（スノーボールサンプリング）を行った。調査結果の整理分析にあたり、質的データ分析（コーディング・カテゴリ化）と SCAT を用いた。

2022 年に、HIV 陽性者への在宅訪問ボランティア活動を実施している看護師へのプレインタビュー調査を行った。この結果をもとに 2023 年には当該看護師とエイズ拠点病院の MSW から支援現場での現状を聞き取り、これまでの研究結果に繋ぐ知見を得た。

4. 研究成果

(1) 陽性者へのインタビューデータの質的データ分析の結果、以下のようなカテゴリが抽出できた（データの一部をそのまま記載）。

① 長期的支援のあきらめと不安や課題の抱え込み

・医療/福祉専門職からの長期的な支援の利用しづらさ

「陽性がわかって、3 年間ぐらいの間の医療とかケアをちゃんとしたら、あとはあんまりもう心配要らないんじゃないかって（医療従事者等の専門家が考えているような印象を受ける）。」「本当は、長期療養の時代なんだから、長期療養をどうやってうまくこなしていくかっていうことにも、助けてほしいものが本当はあるけど。」「よい患者でないといけなくていうような、弱音を吐くことが恥ずかしいことなんだっていうような。本当は、5 年経っても 10 年経っても、やっぱりつらいことは出てくる」

・抱え込み

「HIV 陽性の人たち同士で協力し合って、介護してもらおうとか、孤独死しないようにどうするかとか、もし亡くなってしまったときには、もう両親とかももう他界していたり、まあ、家族とも疎遠になってる人が、ゲイの人は多いからお葬式どうするかとか、もう互助会みたいなのを仲間内につくったほうがいいんじゃないかとか、そういうことも最近では考えている」「グループホームとか、自分たちでベースをつくって、地域のボランティアの方々とか、ソーシャルワーカーさん、お医者さんともそこに協力してもらって、ボランティアでかかわってもらえるような形で、何か仕組みがつかれないか」

② 医療、福祉への不信とサービス利用拒否

「医療従事者の中でも（HIVは）周知されていないので、施設とか入院とかは本当に怖いですね、どういう扱いを受けるのか。どんなことされてしまうんやろうって、怖いですよ、不安というより。」「不安な思いを抱えて、怖い思いを抱えたまま、自分は入院したり入所できるのかって考えると、自分はもう家で、苦しんでもいいので、自分の意思が通じる状態なのであれば、入院もしないし、施設にも入らないと思います。言い方悪いですけども、野たれ死んでたほうがいい」

③ 親（定位家族）との関係性

「老後っていうと、親がまず出てくるんですよ、やっぱり。その人らのことをあんまり考えたくないから、（老後への考えを）とめちゃうかもしれない。」「親は健在やけど、連絡全然とってないんでね、ちょっとどういう状況かもわからないんですけど、元気なんかどうかも知りません。」「介護の大変さも、具体的には、僕は、親を（施設に）入れたこともないから、知らないんですよ。例えば、公共のサービスがどこまであるとかは、僕は知らない」

④ 自身の高齢期の生活をイメージすることに消極的

「・・・何かぼやっとは考えるんですけどね。」「動けなくなったらどうするのとかね、動けなくなったら宅配になるとかね、届けてもらっても、まず玄関に行けるのとか、ありますよね。・・・そんなときに、どうやって生きてるんやろうって。助け合いとかしませんかとか、まあ、自分やったらようせえへんわと。」「高齢期っていったらね、誰かに助けてもらうっていうことは、一番ないとこな気がするんですよ」「1人で生活してるイメージですね。自分でどうにかするしかないって。」「お葬式の前の、それまでどう生きるかって本来の課題だけれど、介護の問題は自分たちには考えるのが難しいから、ちょっと飛ばしてという・・・」

⑤ 地域コミュニティへの帰属意識の低さ

「のんけの人としゃべってもしんどいんですよ、女性でも男性でも。人生が違う、やっぱり。人生の共通項があんまないんで、こっちから話を合わすしかないから、しんどい。話合わさないといけない。みんな共通の話っていったら、家族とか子供でしょう。それがいいから、こっち（セクシャルマイノリティ）から「お孫さんは？」とか聞かなあかん。」「お子さんは？」とか「ご家族は？」とか「お孫さんは？」とかっていうふうにして聞かれるのはやっぱりしんどい」

（2）陽性者1名のインタビューデータのSCATを適用した分析からは、被験者の高齢期の生活イメージ生成過程に関して、以下のような特徴が見られた。

① 同質性（セクシャルリティ、陽性者）を有する人との高齢期の生活不安の共有と一方での同質性への反発

ゲイを対象としたグループホームを作るというたとえ話から「ゲイであることは気にしなくていい」「そういう所の方がハードルが下がる」と実際の福祉サービスを利用する際に既存の施設の利用に比べ同質性を有する人の方が気軽であると感じる一方で、「ゲイっていうだけの共通項しかないじゃないですか。その共通項だけではね、仲良くなりません。だって、趣味趣向も全く違う」と同質性への反発も語られた。

② 日常での異質性（セクシャルリティの違い）との絶え間ない直面

のんけ＝マジョリティの間での共通項を家族、子どもと捉え、家族というテーマの共有困難な状況を強く語った。語りで繰り返し用いられる「共通項」という言葉は「ゲイ＝マイノリティ」に対しても、「のんけ＝マジョリティ」に対しても用いられており、セクシュアリティに関わらず他者と相通ずる部分、自分の居場所を求めている帰属欲求とその欲求が満たされない孤立感が読み取れた。

③ 社会構造と治療（支援）関係に影響を及ぼすジェンダーバイアス

語りからは、男性が上で女性が下であり、持ち上げられる対象としての「男」の自分を感じていること、同時に、

「男性が上」「それが円滑にいくようにできている社会」＝男性に特権を与えている社会の中で、ゲイ男性は被抑圧（被害）者性を有しやすく、重いコストを負う、あるいはその可能性を感じてきており、持ち上げられる対象である「男らしい」男として見る女性、持



図 1

ち上げる対象に位置づけようとする女性に対しての抵抗も読み取れた。

④ 地域での孤立感と居場所の喪失

「地域コミュニティは、家族制度から成り立ってる」と表現し、「だから嫌」「自分は絶対参加しない」「地域コミュニティってわりと排他的」「なじまない人を追い出す」と、異質性を有する自分自身を「なじまない人」と捉え、排除される、追い出される対象として捉え、「同じ地縁だからって、仲間にはなれない」と、地域住民と「仲間」ではないと感じている。常に居場所の喪失感を強く感じていることが推測される。

これらの調査結果から得られたカテゴリを関係づけ、可視化したものが図1である。

(3) 2023年の支援者とのオンラインセミナーでの討論を踏まえた成果

エイズ拠点病院のMSWとNPOで在宅訪問ボランティアを行っている看護師による実践報告と鼎談を行った。

地域包括ケアシステムが推進される中、陽性者のように、地域コミュニティに自分の居場所がないと感じている人びとがいる。それらの人びとへの福祉専門職の働きかけは大きな課題と考える。

地域包括ケアシステム、地域での支えあいの仕組み作りには、「家族ありき」で考えられてきた部分が多い。しかしながら社会を熟視すると、従来の狭義の家族という考え方、枠組みを超えた捉え方、取り組みが必要と考える。

また、陽性者への支援においてはその特有の知識も必要である一方、より高い視座では、精神障害者など社会的排除の状態に陥りやすい当事者と共通する課題、特徴も多く、殊更に陽性者支援を切り取って考えることでもないという気付きも得られた。この点は、陽性者への支援経験が少ない(ない)専門職にとっては、支援に対する心的障壁を小さくするものとなったことが、セミナーアンケートから判明した。

陽性者の生活の質(QOL)を見つめると、公的サービスの限界を強く感じるようになる。インフォーマルなサービスはその隙間に対応する大切な存在であることが改めて実践報告から浮き彫りになった。

福祉サービス利用に消極的な対象者においては、MSWが地域のサービス提供者とどのような関係性を築いているかが重要となることも明確になった。MSWがサービス提供者はどのような人たち(バックグラウンド等)か、どういった支援ができるのか等の説明ができること、いわゆる顔の見える関係ができており、サービス提供者との関係性を陽性者に説明していくことがサービス利用に安心して繋ぐための条件となることが示唆された。

なお、このセミナーの内容については冊子にまとめ希望者に配布した。

〈引用文献〉

- 1) 須貝恵、吉用緑、センテノ田村恵子、鈴木智子、辻典子、井内亜紀子、濱本京子、田邊嘉也、伊藤俊広「診療案内からみる拠点病院の現状」『日本エイズ学会誌』17:1 84-186 2015
- 2) 小西加保留、藤田譲、大野まどか、梶原英晃、高田雅章、「精神疾患やメンタルヘル스에課題を持つHIV陽性者へのソーシャルワークに関する実態調査」『厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究』(研究代表者 白阪琢磨) 平成26年度研究報告書 237-248 2015
- 3) 清水茂徳、磐井静江、小西加保留「要介護状態にあるHIV陽性者を支える地域の社会資源・制度の課題ーエイズ治療拠点病院ソーシャルワーカーへの実態調査からー」『医療社会福祉研究』20:77-87 2012
- 4) 公益財団法人エイズ予防学会『HIV/エイズの基礎知識』p3 2015

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大野まどか	4. 巻 第19号
2. 論文標題 HIV陽性者の高齢期の生活イメージ生成過程に関する研究－当事者の語りの分析を通して－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪人間科学大学紀要 Human Sciences	6. 最初と最後の頁 1, 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 児島 美都子（監）、成清 美治（編著）、竹中 麻由美（編著）、大野まどか（編著）、渡辺央、崔銀珠、伊藤隆博、巻泰弘、田中希世子、木村多佳子、室田人志、加納光子、宮崎牧子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 216
3. 書名 保健医療と福祉	

1. 著者名 杉本 敏夫（監）、中島 裕（編著）、坂本 雅俊（編著）、井上健朗、武田誠一、大野まどか、和田光徳、多田千治、松岡千代、竹中麻由美、高井裕二、村上信、片岡靖子、三浦修	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 236
3. 書名 保健医療と福祉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------